

古宮遺跡の調査

—第152-8次

1 はじめに

本調査は、個人住宅の新築にともなう調査であり、明日香村教育委員会の委託を受けて実施した。調査地である古宮遺跡は、甘檜丘から北北西へのびる緩勾配の尾根の北方にあり、豊浦寺の北に位置している。現存する古宮土壇付近から古瓦が出土すること、また1878年に金銅製四環壺が出土したことなどから、小墾田宮推定地のひとつとして古くから注目されてきた。調査地のすぐ南には県道「檀原神宮東口停車場飛鳥線」が走っている。

調査区は、小墾田宮推定地第1次調査区（『藤原報告Ⅰ』、以後1次調査とする）と同第2次調査区（『藤原概報4』、以後2次調査とする）の間に位置しており、事前の協議に基づいて、南北8m、東西7mで設定した。調査面積は56㎡である。調査は2009年2月17日に開始し、3月5日に終了した。

2 検出遺構

調査区の基本層序は、上から表土（約10～20cm）、置土（約30～50cm）、砂混黄灰色粘質土（約20～30cm：旧耕作土）、砂混褐色粘質土（約5cm：床土）、暗灰黄色砂質土（約25cm：遺物包含層）、にぶい黄褐色砂質土（約30cm：整地②）、暗灰黄色砂質土（約40cm：整地①）、暗灰黄色砂質土（地山）を確認した。

調査区南端では地山の上に県道下に向かってのびる整地土（整地①）を確認することができた。調査区南半を南東から北西に横切る斜行溝SD201は、この整地を掘り込んでつくられている。また、SD201を埋め立て、新たに整地した後に（整地②）、東西溝SD4380がつくられている（図150）。

斜行溝SD201 幅約1.5m、深さ0.3～0.6mの素掘溝である。平面では南肩のみを検出し、幅は壁面で確認した。東西方向に流れる溝であるが、西で北に振れる。出土遺物が少なく、本調査の成果のみで時期を判断し難い。2次調査で確認したSD201（底幅約1.8m、深さ約0.4m～0.6m）は、方向が今回発見した溝の延長にほぼ合うことなどから、一連の溝と考えられる。

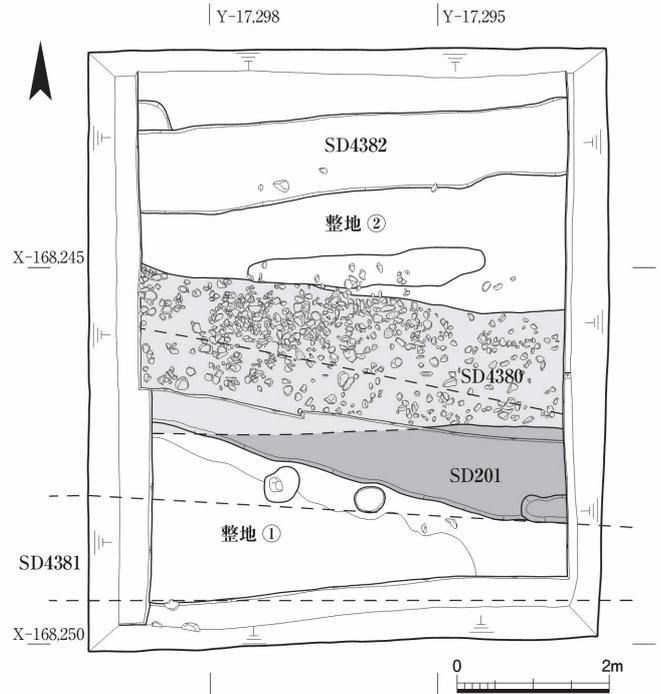


図148 第152-8次調査遺構図 1：100

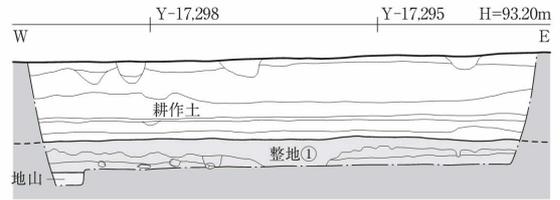


図149 調査区南壁断面図 1：100

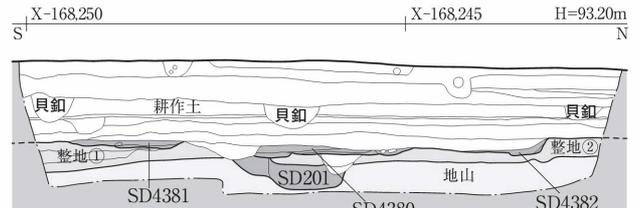


図150 調査区西壁断面図 1：100



図151 調査区全景（北から）

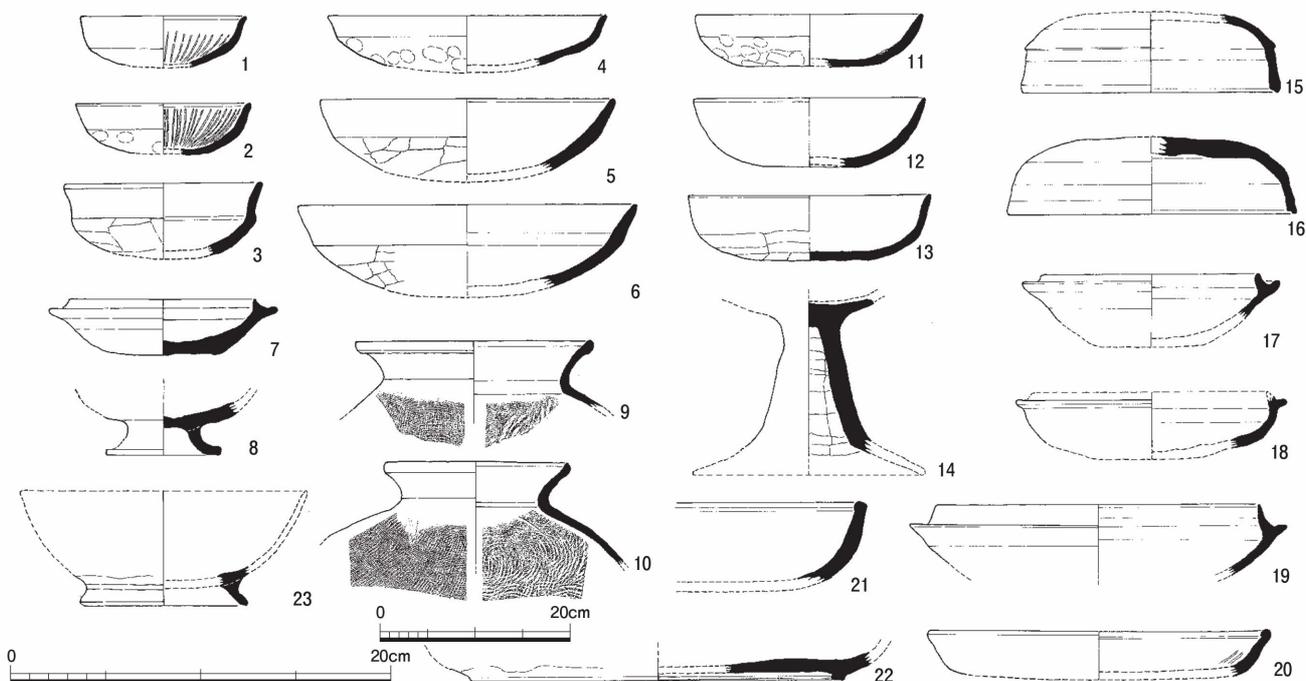


図152 古宮遺跡出土土器 1:4 (9・10のみ1:8)

東西溝SD4380 SD201を埋め立てた後につくられた素掘溝。幅が約1.5～2m、深さが約0.2mの溝で、ほぼ東西に正方位をなす。最下層には砂の堆積層があり、一定量の流水があったとみられる。上層では大小の礫が投げ入れられていた。上層から平安時代前期の黒色土器A類の椀高台が出土しており(図152-23)、最終埋没時期は平安時代前半と考えられる。削平のためか、1次・2次調査区では平面で検出していない。

東西溝SD4381 SD4380の南方で確認した素掘溝である。幅1.5m、深さが約0.1mであり、整地①を掘り込んでいる。礫混じりの砂質土が堆積しており、流水があったことがわかる。平面では検出していないが、調査区の西壁・東壁で確認しており、SD4380と同様の東西溝であったと考えられる。

東西溝SD4382 整地②を掘り込む素掘溝。幅が約1m、深さが約0.1mの溝で、埋土からは、小破片ではあるが、平安時代末期～中世前半の土器が出土している。

3 出土遺物

今回の調査で出土した土器や瓦は小破片が多いため、2次調査出土の遺物も含めて報告する。今回の調査に関わる斜行溝SD200、斜行溝SD201、東西溝SD202出土の土器(2次調査出土の整理木箱9箱分)を提示し、あわせて瓦の概要を記して今回検出した遺構および2次調査で確認した遺構の年代を推定したい。

土器(図152) 本調査区からは、弥生土器から近現代の

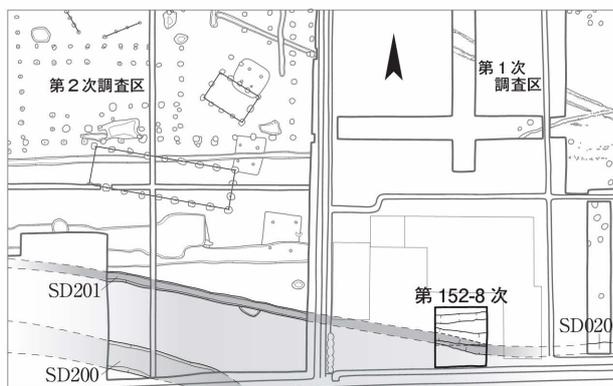
陶磁器類まで、整理木箱2箱分出土した。主体を占めるのは古代の土師器・須恵器である。整地①・②の出土遺物はともに7世紀代の土器が主体を占める。

斜行溝SD200出土土器 SD201と対になる溝であり、整理木箱3箱分の土器が出土した。埋土は下層と上層にわかれる。1・4・8は下層から、3・7・9は上層からの出土である。

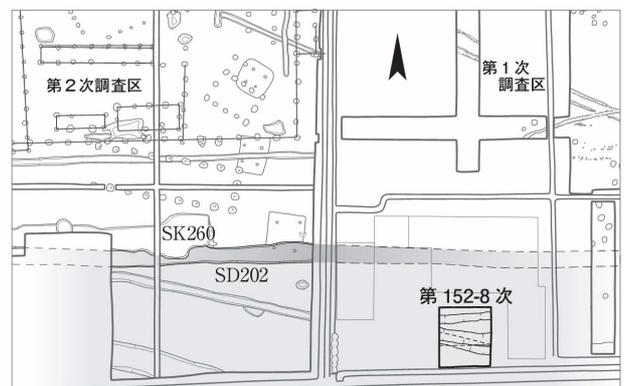
1・2は土師器杯Cである。内面には放射暗文がみられる。1は口径が8.8cm、径高指数が31、2は口径が9.2cm、径高指数が29である。4は土師器の杯Cである。器高が浅くなり、皿の器形に近い。3・5・6は土師器杯Hである。3は5・6に比べて口径が小さく、深手である。5・6は、器高が浅くなるとともに体部の傾きが緩やかになっている。7は須恵器杯H、8は短脚の高杯である。9・10は7世紀代に通有な須恵器甕の口縁部である。1～3・7・8は飛鳥Ⅱの様相を呈するが、4～6は新相を示す可能性がある。

斜行溝SD201出土土器 埋土から整理木箱4箱の土器が出土した。6～7世紀代の土器が主体である。上層、下層に分かれ、12・15は上層出土であり、それ以外は下層出土である。

11・12は土師器杯Gである。11は、外面体部下半に指オサエがみられ、底部はケズリで調整されている。内面には漆が付着している。13は土師器杯Hで、体部下半にケズリがみられるが、器形は杯Gに近く、杯Hと杯Gの中間形態といえる。14は土師器高杯Hの脚部である。15



I期



II期

図153 遺構変遷図 1:1000

～19は須恵器杯口である。17・18は7世紀前半～中頃の所産であるが、15・16・19は古墳時代後期的な要素を色濃く残しており、古手混入と考えられる。

東西溝SD202出土土器 SD201の北方にあるほぼ東西正方位の溝であり、埋土からは整理木箱2箱分の土器が出土した。20は土師器皿A、21は土師器皿である。22は須恵器の皿Bで、橙色を呈する。底部外面をヘラケズリで調整している。これらは上層から出土しており、8世紀前半期の所産と考えられる。図示はしなかったが、出土土器は6～7世紀の土器が主体をなすものの、8世紀前半の土器が含まれること、8世紀前半の土器が廃棄されている土坑SK260より古いことから、SD202は8世紀前半には埋没したと考えられる。(木村理恵)

瓦類 調査区からは、平瓦101点(7.8kg)、丸瓦41点(3.5kg)、不明道具瓦1点が出土した。瓦は、古代から中世までのものが含まれている。

出土した瓦は、東西溝SD4380から出土したものが大部分を占める。7世紀前半のものもいくつか確認できるが、ほとんどは縄叩きを施し、その時期は藤原宮期～平安時代にかけてと考えられる。いっぽう、斜行溝SD201からはごく少量の丸・平瓦が出土しているが、これらは全て粘土板桶巻き作りで、藤原宮期以降の瓦はみられない。また、東西溝SD4382からも瓦が少量出土しているが、いずれも小片で時期は不明である。

隣接する2次調査出土瓦をみると、斜行溝SD201からは、瓦が1点のみ出土しており、それは丸瓦先端を片ほぞ加工した軒丸瓦の接合部である。この資料は丸瓦先端凹面側の斜めの面が長く、先端部は外縁の一部をなしていたようである。また丸瓦の径はかなり小さい。この特徴は、和田廃寺VおよびVI型式と合致し、飛鳥寺や豊浦寺所用の片ほぞ加工のある軒丸瓦にはみられない。瓦当が残存していないので断定はできないが、和田廃寺所用

瓦の可能性が指摘できよう。その場合、この資料は7世紀前半に位置づけられる。

いっぽう、SD201と対になる可能性のある東西大溝SD200からは、比較的多くの瓦が出土しており、瓦の出土量の少ないSD201とは対照的である。SD200では、豊浦寺所用軒丸瓦I Aa型式の小片をはじめとした7世紀前半の瓦が主体となる。

また、東西溝SD202からは、7世紀前半～奈良時代までの丸・平瓦が出土している。(石田由紀子)
その他 重機掘削時に、耕作土を掘り込む三条の東西溝を検出した。溝からは近現代の貝釘生地を繰り抜いた残滓や釘生地が出土しており、素材はすべてサラサバテイ(タカセガイ)である。貝殻は円錐型であり、側面や底面に円形の穴が連続して繰り抜かれていた。穴の大きさは、直径が12～13mmと17～18mmに集中する。この貝釘製作残滓が溝状に出土したことから、単なる廃棄ではなく、畑の水はけを良くするための廃棄物利用であったと考えられる。(山崎 健)

4 まとめ

今回の調査成果をもとに、改めて2次調査の所見を加え、周辺の遺構について再検討したい。

斜行溝SD201の性格 今回検出した斜行溝SD201は、現在の県道とは異なり、地形に沿って、尾根を北方に迂回するよう延びている。また、2次調査の調査区南端では、斜行溝SD201に平行する斜行溝SD200(幅約3.8m、深さ約0.5m)を検出している。このように、SD201には対になるようなSD200が南側に存在していること、SD201が掘り込む整地土(整地①)がSD201の南側だけに広がることから、整地①は道路を形成する土であり、南側溝としてSD200、北側溝としてSD201がつけられたと考えることができよう。両溝の心々間距離は約11mである。

次に両溝の年代について言及したい。SD200やSD201から7世紀中頃の土器が出土していることなどから、両溝の最終埋没時期は7世紀中頃以降、藤原京造営期までの間と考えてよいであろう。

さらに、2次調査で検出した7世紀前半の建物は、方位が東西方向に対して東で 10° ～ 30° 南に振れる遺構が多く、溝の方位とほぼ一致する。また、これらの建物が、いずれもSD201より北側に限られている点も、SD201とSD200の間を道路と想定する根拠のひとつとなろう。なお、1次調査でも、現在の県道に北接し、ほぼ並行して走る東西溝SD020（幅約1.5m、深さ0.2～0.4m）を検出している。ほぼ正方位であり、7世紀後半に廃絶したとされる（『藤原報告I』）。この溝が、SD201に接続する可能性もあるが、正方位である点等の問題が残る。

調査区周辺には、『日本霊異記』に「豊浦寺の前の路」としてあらわれる山田道が通り、調査区南方の県道がこの山田道をほぼ踏襲すると推定されている（小澤毅「阿部山田道について」『山田寺発掘調査報告』奈文研、2002）。今回検出した遺構もこの山田道と関連する可能性が高い。既調査では飛鳥川東岸の山田道の道路側溝は確認されていたが、今回の調査で、飛鳥川西岸における7世紀代の山田道を復原する手がかりを得ることができたといえる。斜行溝SD201は、やや方位が振れることから、正方位にのる直線道路として整備される以前の山田道の様相を示す可能性が高く、飛鳥川以西の山田道の整備年代を考える上で有益な成果といえよう。

遺構変遷 今回の検討により得られた遺構変遷を図153に示す。I期はSD201を北側溝、SD200を南側溝とし、東で南に振れる東西道路があったと考えられる。この道路の北側には、方位が東西方向に対して東で 10° ～ 30° 南に振れる建物が展開していた。II期になると、I期の道路側溝を埋めるとともに新たに整地をおこない、SD202を北側溝とする直線道路を設定した。道路の北側に展開するほぼ正方位の建物群はSD202と振れが等しい。

2次調査のSD202は、溝の心の座標がX-168,233.50、Y-17,321.60である。藤原宮期の山田道北側溝とされる、山田道第2・3次調査で検出した素掘溝SD2540の溝の心はX-168,218.50、Y-16,651.60である（『藤原概報21』）。SD202とSD2540を同一の溝と仮定するとその位置関係

は、東西距離670m、南北距離15mであり、東で 1° 程度北に振れる溝となる。これは藤原京条坊の振れに関する既研究の成果ともほぼ整合する（入倉徳裕・小澤毅「藤原京六条大路の再検討」『紀要2008』ほか）。以上から、SD202は藤原宮期の山田道の北側溝であった可能性は高い。2次調査東壁断面図を参照すると、SD201を埋めて、北側にのびる整地がなされており、これを掘り込んでSD202が作られている。この整地が北側に続かずSD202までで終わる点も、SD202を北側溝とする道路があったと考えられる根拠といえる。SD202を北側溝とすると、現県道下に南側溝があると想定できるが、今後の課題である。

次の段階では、東西溝SD4380がSD201の上層に形成される（III期）。SD4380は2次調査の東壁断面図でも確認することができるが、西壁断面図では対応する層を認識し難い。SD4380とSD202とは直接重複関係がないものの、SD4380からは平安時代前半の土器や瓦が出土しており、あきらかにSD4380の方が新しい。SD4380が道路の北側溝として機能するようになったと推定してよいだろう。平城遷都後も、道幅は狭めつつも、山田道は基幹道路として存続していたことがうかがえる。この段階での南側溝は、2次調査の断面図等から復原することは難しく、今後の課題といえる。

SD4380が埋没して以降は、その南方のSD4381が道路北側溝として利用されていたと想定できる（IV期）。両者は直接重複関係をもたないものの、溝底の標高を比較すると、SD4381の方がやや高い位置にあること、また2次調査の東壁断面図で平安末期のバラス層としている層がSD4381と対応する可能性があり、東西方向に延びる帯状に、バラスが面的に検出されている様子が窺えることから、SD4381が平安時代末期頃の道路北側溝であったとの想定は可能であろう。現代の県道により近い位置になっている。

以上、今回の調査および既調査の成果をふまえ、現段階で可能な限りの推論を展開した結果、現代の県道は造り替えられつつも、古代より利用されてきた道路を踏襲している可能性が高いことがわかった。今回は小規模な調査だったが、山田道の歴史的な変遷を考える上で貴重な成果を得ることができた。（木村）



図154 高松塚古墳・檜隈寺周辺の地形図 1 : 15000